

長い木を切り倒して、蔓でつなぎ、組合せて、草の葉で屋根を葺き、スコールの災害を防いだその時の皆の喜びは今なお生々しく覚えている。

◎芋類は昨毎に責任者を提示して、競って川底の泥を株間に施し、落葉を集め根元に敷く等して生育を早めた。

そのような抑留生活のうち、昭和二十一年春からぼつぼつ内地帰還の話が、ちらほら聞かれるようになり漸く生還も有り得るような感じがして来た。

野菜や芋類も充分収穫出来て、全員生気を取り戻すことが出来た頃、昭和二十一年五月二十二日私は「船内監視、病人看護及荷物の積下し要員として乗船し、任務終了後は復員を命ず」ということで帰還出来た次第です。

五月二十五日、和歌山県田辺港が見えて来た時の感激は今なお忘れることは出来ません。

## 濠北派遣搜索第五連隊

—海難、ニューギニア防衛戦—

島根県 神在 繁

私は、大正十一年六月二十四日、島根県山口町で生れた昭和十七年徴集兵であります。広島騎兵第五連隊補充隊に入隊したのは、昭和十八年四月、教育を五か月受け、同年九月宇品港を出航したのだが、十日の日に船団の「大和丸」は、関門海峡を出て直ぐ沈没した。

自分たちの船は基隆を出、馬公経由した後の九月二十七日、カムラン湾でやられた、船には第五師団の補充隊要員約三千名が乗船していたのだが、戦死者は二百四十名ということだった。

潜水艦は五発魚雷を撃ち、そのうち二発が命中、四く五十分で沈没してしまつた。兵隊は救命胴衣を着ていたが、甲板にいた者はやられてしまつた。何千人

の人が飛び込むのだが、海面には随分ぎっしり、いろいろな物が浮いているため、縄梯子で一人一人降りるから、沈没した時は船内に相当の人たちがいた。

その時、船は船尾から縦に沈んだので被害は少なかった。若し横倒しに沈んだら我々も駄目になっていた。同じ船団の「鹿島丸」に乗っていた岩田清氏が『私の歩んだ昭和史』として、産経新聞に書いてあった記事を読んだ。そこには、我々の船が直立して沈没していく写真が掲載してあった。私はそのコピーを送って問い合わせたが、とうとう判らなかつた。大阪府の堺市の方というのだが。

※その記事には次のようであった。

昭和十八年九月、私たちは横浜正金銀行（現在の横浜銀行）の南方の各支店に赴任するため、宇品から「鹿島丸」（二万トン）に乗った。その後、ボーイからえらいことを聞いた。「爆弾を満載したこの船は必ず轟沈する。救命具なんかおかしくて」と。昭南島（シンガポール）どころか海底行きのとんで

もない船に乗ったわけ。

駆逐艦「汐風」（他一隻と思う）に護衛された六隻（九隻と思う）の船団は、夜にまぎれて爾々と脱出した。東シナ海に入るやいなや、前を進んでいた「大和丸」（二万トン）がまず血祭りに、夜目にも、赤みを帯びた船体が見えた。船客九百十六人中遭難者が二十九人とどまったのは十三夜の月が照っていたため。

（人員については）

台湾から護衛船もいなくなり、心細くなる。制海権も制空権も失った海に、船団（七隻だと思ふ）はジグザグの航跡を引きつつ、時速八ノットで進んでいく。まるで五つ並んだ柁のよう。

いっどこでやられることやら。夜は危なくしておちおち眠られず、目までかすんで、世の中が黒ずんで見える。人の影も自分の影も心なしに薄れてくる。

海南島あたりから米潜水艦がしつこくつきまといだ。カムラン湾南南東百マイルの沖にさしかかったとき、ついに船の横腹を魚雷で二度えぐられた。私

は身ひとつで救命ボート（陸軍船舶工兵隊のキャッチボートである）にのがれたが、甲板上にまだ無数の兵士がとりのこされている。

あつという間に船は傾き、積荷や人間の転がり落ちる轟音と悲鳴はまさに地獄だ。船はたちまち海中に没し去り、後には青黒く巨大な渦巻きができて、近くにいた兵士やボートまでのみこんだ。昭和十八年九月二十七日午前八時二分、雷撃を受けて二十分後のことである。

ところで、この船が轟沈をまぬがれたのは、蘭印向け軍票の木箱の山に魚雷が命中し、奇跡的にも衝撃が和らげられたためという。なお、この船には陸軍部隊千六百三十五人、船客百七人が乗っていた。

なお、写真は同僚の故塩見増三氏が水びたしのボートの中から撮った決定的瞬間。④…巨体を大きく傾ける「鹿島丸」で、無数の兵士が海に浮かぶ、⑤…ゴムボートに必死にしがみついた兵士たち、⑥…前部のマストをわずかに見せて「鹿島丸」が沈没する瞬間だが、まわりの兵士たちは海に吸い込まれて

もう見えない。

沈没時の描写もそうだが、ここに掲載された三葉の写真は、当時、海中に浮いている私たちの姿、沈没する船の状況を、まざまざと見せつける迫真のものなので、岩田さんを捜したからです。

この記事を見て、その船に乗って、沈没船と運命を共にしたかも知れなかった私は、もう一度當時を思い出して、次の様な「憶い出」という、メモともいえる小文を書いてあった。

『私にとって生涯忘れられないこと、いや忘れてはならないことの一つ、昭和十八年九月二十七日の朝である。

場所は南支那海カムラン湾沖であった。七隻の輸送船団は中央に臺北派遣軍の第五師団の補充要員として、三千名の現役軍人が乗船している「鹿島丸」を守るかのような態勢で南へ南へと進んでいた。

昼食前の八時頃だったと思う。甲板にて大声で

「退船準備」。この頃、毎朝のように退船訓練を続けていたので又かと思っていた矢先、ドカーン、ドカーンと二発の大爆発音。続いて下士官の号令「B甲板に集合」船倉の兵隊は我れ先にと繩梯子を登る。私は丁度下着を着替えるため装具や、軍服を脱いだときで、大混雑の中、思う様にならず、漸く甲板に上がったときは、最後尾に並ぶ破目になった、見ればマストや、船橋は大斜めに見える。

炊事場付近には荒波が寄せている。B甲板に整列した皆が退船命令を待っていたが輸送指揮官は船員と一緒にボートで脱出していた後で、命令を出す者がいない。野砲兵連隊のその軍曹が独断で命令を出す始末、漸く繩梯子を降りて出したがなかなか時間がかかる。

私は間に合わぬと判断、一人甲板へ降り飛び込むつもりだったが、海面には爆発による船上の物品がギッシリと浮いていて、飛び込むことが出来ない。見れば船員達が脱出したボートのロープが二メートル位先に下がっていた。咄嗟にロープに飛びつき海

面へ脱れた。

平素の訓練で、百メートル以上逃げていないと船に巻き込まれると聞いていたので死物狂いで泳いだ。五く六十メートルも離れた時だった。大音響と共に船体は船首を上縦になって波間に消えていった。

沈没直前の光景は、今でも脳裏に焼きついて離れない。甲板の手摺りにしがみついている者。上陸用舟艇が八隻積載してあったが、それに乗って結束したロープを切れば、舟が沈んでも舟艇は浮くと思っただであろが、舟艇は全部ひっくり返り海中に投げ出されてしまった。

正に地獄絵巻だった。一瞬にして二百四十数名の戦死者をだした。思えば第一期検閲を終え一人前の軍人になったばかりの二十一歳の初年兵ばかりである。僅か二十日前の九月六日、宇品港にて親兄弟に別れを告げて勇んで戦地へと出発した筈だったが。

南支那海の真中、鳥影一つ見えず山の様な大うねりの中、二千七百名の若者はそれでも皆元氣だった。「離れたら、饑にやられるぞ」とお互いに励まし合

いながら、救助を待った。夕方漸く救助され、鉄板張りのタンカーの甲板へ魚でも干すように並べられ、九二日間、漸く今の南ベトナムのサンジャックへ上陸出来た。

以来、ニューギニアまで各地を転々と悲惨な戦争を体験し、幸い生きて復員出来たのだが、海底に眠る同年兵たちのことを思うと胸が痛む。

毎年九月二十七日には近郊の鹿島丸生存者の集いを催し亡き戦友の冥福を祈っている』

このメモにあるように、航海は二日半かかり、暑さを耐えながら、仏印のサンジャックに上陸した。船が沈没したのだから我々は兵器も衣料も無く、補充も全然出来ない。各隊は補充の兵員だったので下士官が引率していた。

アンボンで部隊から我々を迎えに来た。仏印一か月、昭南一か月後、ジャワのジャカルタへ上陸、汽車でマラン高原へ行き、二か月の訓練を受けた。

今度は、ストラバヤから乗船、セラムの南のアンボン

島上陸。アンボンで二か月滞留し、ニューギニアの本隊から我々補充員を受領に来て、内地からの輸送官は帰った。その間、空襲、マラリア、脚気、赤痢等などえらい目にあつた。私も初めてマラリアにかかり、高熱と悪寒で随分苦しんだ。

西部ニューギニアのカイマナの東、湾の中のエイトバナイに騎兵第五連隊の本部が、二個中隊と共に駐屯していた。第五師団は海洋兵団となり濠北派遣軍で、遊兵となり、浜田の歩兵第二十一連隊がアル諸島にいたので、搜索連隊（騎兵は搜索連隊に編成替え）の半分もアル諸島にいた。福山の歩兵第四十一連隊は東部ニューギニアで随分犠牲を出していた。

我々に対する敵の攻撃は空襲が主で、壕を掘って守っていた。昭和十九年の八月頃、ポンボン船が来たのを敵の偵察機が発見し、九機ぐらいで空襲に来た。それから毎日空襲で、イトナバイに居られなくなり、ジャングルの中へ退避した。そのジャングルの中で、バタバタと沢山の兵隊が病死した。そこは高い山のジャングルで、標高八百メートルぐらいだったという

が、二十年の春頃までいて、カイナマへ転進した。

イトナバイでの食料のことを述べるが、サゴが我々常食で、サゴの澱粉で餅搗をやったのは昭和二十年の正月だったか。内地からの補給の米は大事に持っていて、夕飯は米二、大豆八の割合で、後はサゴ澱粉だった。青物はジャングルの草、夜は海で獲った魚を少し汁に入れてあったぐらい。

ここは、海から直接ジャングルになっている。オランダの水上機基地としてあって、深い湾だから、結局濠北派遣軍は放って置かれ、米軍は我が部隊を超越、比島方面へと北西上した。結局、我々は放って置いても自滅すると思っていたのだから。

ビアク島の玉砕の時、米軍の飛行艇が降りたので、攻撃したら、飛行艇は荷物を置いて逃げた。その時、インドネシア人を捕えて、金鶏納草や日本将校の軍刀や服を押収した。米軍はニューギニアで北上し、我が軍はホーランシアで玉砕した。陸路を山を越し、徒歩で東北の部隊（第三十六師団雪部隊）が来たが、八百名ぐらいが四十人になったと言っていたが、ポロポロ

の服を着ていた。

先に申したカイマナには三月頃転進したのだが、そこで終戦になった。判ったのは八月十七、八日頃で、連隊本部にはラジオがあったからだ。

第五師団司令部はアル諸島にあったが、師団各連隊から各一個大隊を東部ニューギニアに転属させていたし、騎兵第五連隊は前にも申したとおり、昭和十八年二月に捜索連隊となり、戦車、装甲車に編成替えとなっていたため、私は四月に入ったので既に馬は一頭もいなかった。

マイマナには歩兵部隊と一緒にいて、武器は速射砲、重機関銃、軽機関銃、擲弾筒で車両はなかった。しかし、武装解除の時、マイマナには海軍もあり、大きな砲、上陸用舟艇も数隻あり、諸兵器を九二日ばかりで海へ投下した。その時、これだけ兵器があればまだ戦争が出来ると思った。

武装解除後は、自給自足のため農業をやった。さつま芋、タピオカ、カボチャ、野菜などを作ったが、その種は何処から持って来たのか、煙草まで収穫した。

航空燃料で火種を作ったり、兵隊にはいろんな人がいて、何でも作った。

私はジャングルへ物資収集に行ったが、一抱えもある冬瓜があったり、唐辛子もあった。ジャングルの中で食べられそうな物は取って来た。

終戦迄の話だが、栄養失調やマラリアと脚気で歩けなくなる。私はアンボンの陸軍病院へ赤痢で三十日間入院したことがある。ニューギニアへ本隊が行く時、遅れたら死んでしまうので必死で一緒に連れていってもらうよう頼んだ。病人は真裸で、病院は地獄、薬も食糧もない。私は木炭を薬にして下痢を癒した。

最後の集結地はソロンであった。昭和二十一年六月、リバテーで田辺港まで直航、十日間で帰ることが出来た。その間にモロタイ島に寄港したが、戦犯者が沢山いた。私の部隊でも、大尉と軍属が引っぱられて、モロタイ島で処刑された。モロタイ島が処刑場だった。住民や連合軍の面通しで「お前だ」と言われればそれでおしまいだ。人違いであろうと、悪意であろうと、無実であろうと、それだけで戦犯となってしまう、処

刑された人が随分いた。

復員後もマラリアが出て高熱や悪寒で苦しんで、体力の回復も遅かった。私は戦前郵便局に勤めていたが復職出来ないため、農協に勤め公務員でなくなった。その後、キニーネを飲んで、マラリアは二年ぐらいで出なくなった。軍隊で鍛えられたためか、体は丈夫になった。

インドネシア独立の先兵

## 兵補教育と終戦

兵庫県 神崎 芳郎

私は大正十年四月十五日生れ、入隊後、陸軍兵器学校に入校、昭和十八年十月、同校を卒業し、南方戦線に従軍しました。終戦後の昭和二十二年四月復員するまで、その間三年七か月に及んでいます。

着任時は南方総軍直轄の南方軍野戦造兵廠という後方勤務でありましたが、南方軍技術部幹部候補生なら